九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

杉田玄白とその周圍の人たち

野上，豊一郎

https://doi.org/10.15017/2557024

出版情報：文學研究. 19, pp.1-19, 1937-05-27. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

文學研究　第十九輯　（昭和十二年四月發行）

杉田玄白とその周圍の人たち

野上豐一郎

杉田玄白とその周圍にあつた學者たちについて述べるのは、つまり、洋學興隆の歴史を述べることになるが、私の此の說述は一つの目的を持つて居る。それは、日本を今日の開明に導いた洋學を、われわれは今後いかにすべきか、といふことについての一つの示唆にしたいのである。

一

今から數へて百六十六年前の明和八年（一七七一年）の三月四日の日に、當時江戸の郊外であつた千住骨ケ原（こつかつぱら）で、一人の死刑囚の解剖が行はれた。その頃は解剖といふ術語の代りに解體といふ術語が用ひられてゐた。しかし一般には

腑分（ふわけ）といふ言葉が使はれてゐた。裁ち剖いた屍體から五臓六腑を取出して區分して見せるといふ意味であつたと思はれる。メスを執るのは醫者ではなく、死刑囚の屍體を取扱ふ特殊部落民で、醫者は傍に立つて見物してゐるに過ぎなかつたやうである。杉田玄白の手記に據ると、「その日より前までの腑分といへるは、穢多に任せ、彼が某所をさして肺なりと敎へ、これは腎なりと切り分け示せり。夫（それ）を行き視し人ゝ看過して歸り、我ゝは直に内景を見究めしなどいひしまでの事にてありしなり。固より臓腑に其名の書記（かきしる）してあるものならねば、屠者の指し示すを視て落着せしことにて、其頃までのならひなるよしなり。」（『蘭學事始』上之卷）とあり、また、「老屠又曰、只今までの腑分の度ゝ其醫師がたに品ゝをさし示したれども、誰一人某は何、此は何ゝなりと疑はれ候御方もなかりしといへり。」（『蘭學事始』上之卷）とあるから、醫者は自らメスを執らないだけでなく、内臓の指示までも一一特殊部落民に受けるほどで、全然解剖學的知識を持つてゐなかつたことが知られる。

その一例として、岡田養仙とか藤本立泉とかいふ先輩の官醫たちは、それまで七八回も解剖の實地に立合つてゐながら、彼等が漢方の解剖書に依つて學習した知識と實物の觀察の結果と一致しないので解決に苦しみ、結局、人種の差異によつて内臓の構造は相違するものだらうと結論してゐたといふことを杉田玄白は擧げて居る。（『蘭學事始』上之卷）。

漢方の解剖説に疑を懷いた最初の人は山脇東洋であつた。彼は京都に居住する漢方の大家で、官醫の一員であつたが、醫經の記載に對するその疑惑は、寶暦四年（一七五四年）の解剖觀察に依つて確かめられ、同九年（一七五九年）『臓志』を發表して、先人の學説の空言なることを立證し、五臓六腑説を否定した。

『臟志』の所說に動かされた一人は杉田玄白であつた。彼は同じ若狹小濱藩の醫員で小杉玄適なる者が以前東洋の門にゐて、前記の解剖に立合つたことを聞いて居り、また深く『臟志』に刺戟されて居つたので、何とかして自分も解剖の現場を見學したいと熱望してゐた。そこへ丁度江戸町奉行曲淵甲斐守の家士得能萬兵衛の厚意によつて、千住骨ケ原の死刑囚解剖に立合へる便宜が與へられた。彼は雀躍して同志を誘ひ合はせた。その中に前野良澤と中川淳庵があつた。

前野良澤、名は嘉(よみす)、後蘭化(らんくわ)と號した。豐前中津藩の醫員で、青木文藏（昆陽）に就いて蘭學を修め、青木文藏の斡旋で長崎に留學し、吉雄・楢林等の通詞(つうじ)に就いて更に蘭學を修業し、また獨學勉勵して、ほぼ蘭文の構成を會得するまでに達してゐた。當時四十九歲で、青木文藏死歿（明和六年）の後は江戸在住者中隨一の西洋學の新知識であつた。

中川淳庵は名を鱗といひ、玄白と同藩の同僚で、玄白より六歲の年少者（當時玄白三十九歲、淳庵三十三歲）であり、物產學の研究者であつた。

良澤・玄白・淳庵等の解剖見學は、十八年前の『臟志』の著者の解剖見學の時より有利な條件の下にあつた。といふのは、當時日本に於いてはそれ以上に權威のある類書は求められなかつたオランダの解剖圖譜 *Tafel Anatomia* を、しかも二冊も携帶して居つたからである。一冊は玄白が、他の一冊は良澤が持つてゐた。玄白はその書を偶然にもその春、淳庵の紹介で、江戸參覲の甲必丹(カピタン)ヤン・カランス Jan Krans の手から、藩侯の厚意によつて手に入れ、秘藏珍重してゐたのを、當日實物と對照して見ようと思つて持つて行くと、意外にも同じ書を良澤も懷中して居つて、これは先年長崎表で手に入れて秘藏して居るのだといつて出したのを見て、兩人は見較べてみると、全く同一の

書を期せずして携帶したことを知つて、互ひに手を打つて喜んだのであつた。

さうして、その書は、其處で彼等に醫學の研究は西洋の科學的方法に依る外に絕對に方法のないことを確信せしめ、延いてはそれが洋學興隆の楔機となつたことに於いて、重大な役割をしたのであつた。

二

その日、蘭學者たちの劃期的見學の資料となつたのは、渾名を青茶婆と呼ばれた京都生れの女の屍體であつた。執刀者は虎松と呼ばれるその道の器用者の筈であつたが、虎松が病氣のため、九十歳になる老祖父が解剖した。

解剖された屍體の內臟を一つ一つ *Tafel Anatomia* の圖版と對照して調べて見ると、位置も形狀も圖版の通りであつて、まづその正確さに壓倒された。同時に、わが國の醫學が長い間漢方の傳統を無意味に信奉して、肺の六葉兩耳とか、肝の左三葉右四葉とかいつたやうな妄說を無批判的に受入れてゐたことの愚かさが顧みられた。とはいふものの、その一二時間前まで、彼等はまだ *Tafel Anatomia* を信用してはゐなかつたのであつた。良澤が解剖の始まる前にその書を開いて、これが肺臟（ロング）である、これが心臟（ハルト）である、これが胃臟（マーグ）である、これが脾臟（ミルト）であると飜譯しながら指し示しても、彼等の見慣れた漢方の圖說とはあまりにも甚しい相違なので、玄白も淳庵も、良澤自身も、俄かにそれを信じることはできなかつたのである。ところが觀臟の結果、オランダ書の正確がわかつたので、以前に疑つてゐただけ、それだけ却つて傾倒の度合も強くなつた。

その上、更に彼等は刑場に散らかつてゐる骨節の類を拾つて、それ等をも仔細にその書と對照して見ると、ますま

す *Tafel Anatomia* の尊敬すべき眞價を痛感せずにはゐられなかつた。

尊敬は忽ち異常な熱情にまで高まつた。彼等はもはやその書を讀まないではゐられなかつた。一つには、彼等自らの知識慾のため、また一つには、それを飜譯すれば學界のため貢獻するところが少くないだらうと思はれた。しかし、彼等にはオランダ語が十分に讀めなかつた。玄白と淳庵は、しばしば參覲の甲必丹（カピタン）を訪問して新知識の吸收に努めてはゐたけれども、それは隨員の通詞を介してのことであつて、彼等自らオランダ語を話すのではなかつた。もちろん彼等とても多少の單語は知つてゐたであらうけれども、文章の構成については殆んど理解を持つてゐなかつたやうである。良澤は彼等に一日の長を誇つてゐたし、先年玄白に乞はれてオランダ語の訓法を敎へたといはれて居るけれども、それとても果してどの程度の知識であつただらうか。あとで *Tafel Anatomia* の輪讀を始めた時の記錄を見てもわかるやうに、どうも五十歩百歩の差違に過ぎなかつたやうである。すべて甲必丹と話す時は通詞の通譯を通さねばならず、直接に外人と話すといふことはできなかつた。その通詞でさへも、オランダ人と話すことは職業的に許されてあつても、オランダ書を讀むことは許されてなかつた。元和二年（一六一六年）の切支丹禁制が同時に西洋文書の船載をも禁じてあつたからである。今から考へると、殆んど信じられないことのやうであるが、彼等はオランダ語を書き留めるにも片假名を以つてしなければならなかつた。外國文字の使用も禁じられてあつたからである。一例を擧げると、明和二年（一七六五年）に後藤梨春が『紅毛談（をらんだはなし）』を上梓すると、その中に二三の横文字が挿入してあつたといふ理由で幕府は絕版を命じたといふやうな事件があつた。

幕府の解釋によれば、外國文字に親炙することは思想的・宗敎的に危險だと思はれたものであらう。その結果とし

て、外國語は耳と口で用を辨ずべきもので、目で辨じてはならないといふことになつてゐた。――その點、耳と口よりも目を先にしがちな今日のわが國の外國語學修の方法よりも本格的の如くであつたが、しかし、文字使用の禁止は通詞等にとつては甚しく不便なものであつた。遂に彼等は延享二年（一七四五年）青木文藏を介して幕府に陳情し、その結果、通詞三家――西善三郎・吉雄幸右衛門・本木仁太夫の三家――に限りオランダ文字の使用とオランダ文書の閲讀が許された。そのほかにも、青木文藏・野呂元丈の兩人は將軍の內旨に依りオランダ學の研究を命じられてゐたので別格であつた。此の兩人は通詞等の助力を得て、オランダの事物に關する多くの述作をした。青木文藏は晩年書物奉行を命じられた。

上述の如く、オランダ語の使用は制限され、オランダ文字の使用は嚴禁されてあつたとはいつても、時勢の風潮はいかんともすることができず、熱情ある若い學徒たちはひそかに國禁を犯して西洋科學の研究のためにオランダ語の障壁を越えようと勇敢に突き進んだ。その尖端を行つたのが、前野良澤・杉田玄白・中川淳庵の徒であつた。

此の三人は骨ケ原の解剖を見ての歸途、*Tafel Anatomia* 輪講のことを、玄白から提案し、善は急げといふ諺によつて、早速その翌日から前野良澤の家で始めることになつた。良澤の家は鐵砲洲の中津藩侯の下屋敷の中にあつた。今の京橋區新榮町七丁目三十七番地から四十一番地へかけての區域內であつた。

良澤が輪講の指導者に推された。玄白の手記に據ると、「良澤はかねてより此事を心にかけ、長崎までも行き、蘭語茲びに章句語脈の間の事も少しは聞き覺え、聞き習ひし人といひ、齡も翁（玄白）などよりは十年の長たりし先輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐ事となしぬ。」（『蘭學事始』上之卷）とある。

三

われわれはロゼッタ石から象形文字を判讀したり、諸種の板牒からヒッタイト語やバビロニア語を判讀したりした言語學者のことを考へると、殆んど超人的ともいふべきその直感の鋭さと想像の豐富に壓倒されるが、それにも似た異常な直感と想像をわれわれの三人の蘭學者は持つてゐたのではないかと思はれる。

三人の蘭學者は二冊の *Tafel Anatomia* を前にして坐つたが、初めはまるで讀めなかつた。玄白と淳庵はアルファベットさへ正式に習つてゐなかつた。醫學・物産學に必要な若干の單語をいきなりに鵜呑に覺えたに過ぎなかつた。良澤は長崎に留學して多少の素養は積んでゐたけれども、與へられた任意のオランダ文を自由に讀みこなすなどは思ひも寄らぬことであつた。三人は途方に暮れて顏を見合せた。「まことに艫舵なき船の大海に乘り出だせしが如く、茫洋として寄るべきなく、ただあきれにあきれゐたるまでなり」と玄白は告白してゐる。

しかし、決心した以上は推し進まねばならなかつた。殘された問題は、いかにして進むべきかの方法のみであつた。それにはまづ圖版についてオランダ語の名稱と日本語の名稱の合致を求めることから試みねばならなかつたが、それも內臟・骨節などは實物に關する知識が不十分であつたので、最も見易い外形的のものから始めようといふことに意見が一致して、卷頭にある「形體名目篇」の向背二圖からかかつた。

ところが、名稱の對照と同時にその解說の文章を讀まうとすると、すぐさま第一の困難に衝突した。まだ組織的にオランダ文法を學んだことのない彼等であつたから、文章構成法はもとより、品詞の概念さへも正確には持つてゐな

かつたのである。例へば de(*the*) とか het(*it, he, she*) とか als(*as*) とか welk(*which*) とかいつたやうな言葉の語意さへも知らなかつた。「いづれが何やら心に落ちつきて辨へぬ事ゆへ、少しづつは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり」と玄白は後年になつて回想して居る。

例へば「眼目篇」に涙管と機里爾を示すとして目と眉の圖があり、眉の定義として「雙眉毛斜生者也、在目窠上・額之下、」云云、と譯された章句を讀む時、それだけの意味を辿るにも、「彷彿として長き日の春の一日には明らめられず、日暮るるまで考へつめ、互ひににらみ合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得る事ならぬことにてありしなり」（『蘭學事始』上之卷）と歎息してゐるほどの心細い狀態であつた。

また「鼻篇」を讀む時、冒頭に verheffend(*raised*) といふ言葉が使つてあるのがどうしてもわからず、その頃はまだ「辭典（ウオールデンブック）」といふものがなかつたから、良澤が先年長崎から求め歸つた用語例の小冊子を繙いて搜して見ると、その字の用例として、木の枝を切るとその迹が verheffend するとか、庭を掃くと塵が verheffend するとか、さういつた用例を發見したので、それを基礎にして語意を考へることに多くの時間を費した後、玄白が思ひついたのは、庭を掃けば塵が掃き寄せられてウヅタカクなる、また木の枝を切ればその切口がふくれ上つてウヅタカクなるから、verheffend はウヅタカクなつた形であらうといふことであつた。譯文には「夫鼻者、隆起而居面之中・口上・額下、其裏則達上腭矣」とされてゐる。「その時のうれしさは何にたとへんかたもなく、連城の玉をも得し心地せり」（『蘭學事始』上之卷）と、これは苦心の酬いられた一例である。

しかし苦心の酬いられないことはしばしばあつた。例へば Zinnen（精神）といふ言葉の概念などは、三人がいか

ほど文珠の智慧を絞つても捉めなかつた。さういつた字には疑問符を附けて置いて後日の再考を期することにした。その疑問符は丸の中に十文字を書くことにしたので、轡十文字と名づけ、解釋のつかない言葉が出て來ると、これも轡十文字、これも轡十文字、と取りのけて置き、毎年春になれば長崎から參覲の甲必丹に附いて通詞たちが來るから、それに就いて語意を確かめようとか、或ひは屍體解剖の機會を待つて實物と對照して見ようとか、或ひは家畜の屍體を解剖して參考にして見ようとか、さういつた方法を講じるより外に解決の道はなかつた。

まことに慘憺たる苦心の連續であつた。輪講は毎月六七回も行はれ、一年ほどたつと、すでに百回近くも回が重なつて、おぼろげながらオランダ文の構成の原則が感知されるやうになり、語彙の貯蓄も幾らか豐富になつたので、平易な文章なら一日に十行ぐらゐは讀めるやうになつた。さうなると興味も倍加して行き、輪講の前夜は子供が祭の日を待つやうな歡喜で落ちついて眠られず、夜の明けるのが待ち遠しくてならなかつたといふことである。

さういつた熱情は誰よりも玄白が第一で、彼は毎回の輪講を家に歸ると必ずその夜のうちに（漢文に）飜譯して置くことを怠らなかつた。當時玄白はまだ獨身で、家事の煩もなく、自ら多病虛弱と稱してゐたが、心身を擧げてすべての精力を *Tafel Anatomia* の研究に打ち込めてゐた。その飜譯についても、「或は翻譯し、或は對譯し、或は直譯、義譯と、さまざまに工夫し、彼に換へ、此に改め、晝夜自ら打掛かり」（『蘭學事始』下之卷）といつたやうに、稿を改めること前後十一回で、四年の歲月を費して漸く完成、『解體新書』と題して出版されたのが、安永三年（一七七四年）八月であつた。（その前年彼は四十一歲で初めて結婚した。）

玄白の『解體新書』出版の意向はどこまでも啓蒙的で、西洋の科學思想から出發した此の基礎學の綱要をわが學界

に紹介して、在來の杜撰な醫術の方法に根本的な改革を實現させようといふのが目的であつた。その目的のために彼は功を急いだ傾があつて、彼自身も認めて居るが如く、公平にいへば疎漏誤譯の誹は免かれないものであつたが、その點は謂はゆる自レ我作レ古の仕事をした者として寛大に看過すべきであると思ふ。玄白自身も老後の追想として「其頃は彼國俗の精密微妙の所は明了すべき事にはあらず、今の如く思ひよらず開けしより見る人はさぞ誤解のみといふべし。首めて唱ふる時にあたりては、なかなか後の譏りを恐るる樣なる碌碌たる了簡にて企事は出來ぬものなり。くれぐれも彼大體に本づきて合點の行きし所を譯せしまでなり。」（『蘭學事始』下之卷）と辯明して居る。その辯明は文化十二年（一八一五年）玄白八十三歳の時のことで、それより十七年前（寛政八年）に『解體新書』は玄白の高弟大槻玄澤（磐水）の手に依つて改譯され、『重訂解體新書』と題して出版された。玄白の初版を距る二十五年の後であつた。その兩譯書を原書のドイツ語譯と對比した人の說に據れば、一方の粗笨と他方の精覈と甚しき相違であるといふことであつた。

しかし、私には今玄白先生の仕事の粗笨を責める氣持などは微塵もない。却つて私は彼が「艫舵なき船」で「大海に乘り出し」た大勇猛心を賞讃したいのである。彼は仕事を始めるに當つて、「爲すべき事は固より人に在り、成るべきは天にあり」の諺を引いて、悲壯な決心を示したが、仕事を終つて後、「今を以て考ふれば、これまで二百年來、彼外科法は傳はりしなれども、直に彼醫書を譯するといふ事は絕えてなかりしが、此時の創業、不可思議にも凡そ醫道の大經大本たる身體內景の書、其新譯の起始となりしは、不用意を以て得る所にして、實に天意とやいふべし。」と感謝して居る。また同志に良澤の如き好學の士を得たことをも天意に歸して、「世に良澤といふ人なくば此

道開くべからず」といひ、「且つ翁（玄白自身）が如き素意大略の人なくば此道かく速かに開くべからず、是も亦天助なるべし」といつて居る。そこには道を拓く人には許さるべき疎大に對する自負さへも仄見して居る。その疎大と性急がなかつたならば、彼の仕事は成功しなかつたかも知れなかつた。彼の性急は、決心すると同時にその向見ずの仕事を彼に始めさせたが、また始めると同時に完成を急がせた。その理由として、彼は多病である事と齢すでに不惑に達したことを擧げて居る。「人の生死は預め定めがたし。始めて發するものは人を制し、後れて發するものは人に制せらるといへり。此故に翁は急ぎ申すなり。諸君大成の日は翁は地下の人となりて、草葉の蔭に居て見侍るべしと答へければ、桂川（甫周）君などは大いに笑ひ、後々は翁を渾名して草葉の蔭と呼び給へり。」（『蘭學事始』下之卷）そんな逸話も彼の性急を語る一つである。

四

『解體新書』の飜譯は、初めは良澤・玄白・淳庵の三人に依つて續けられてゐたが、次第に同志が馳せ參じて、一つの蘭學運動の如き機構と空氣ができるやうになつた。蘭學といふ言葉もその頃から誰いふとなく用ひられるやうになつた。オランダ以外の西洋との國交は許されず、オランダ語が唯一の學び得る西洋語であつたから、蘭學といふ言葉は同時に西洋科學の同義語でもあつた。從つて蘭學者といへば西洋科學研究の學徒として解されてゐた。

『解體新書』飜譯の同人としての蘭學者の中には、嶺春泰（高崎藩醫）・鳥山松園（庄内藩醫）・桐山正哲（弘前藩醫）・石川玄常などがあつた。その外に桂川甫周があつた。甫周は幕府の外科醫桂川甫筑の息子で、當時（安永元年）二十

二歳の弱冠でありながら父の後を繼いで官醫となり、才氣に富み、蘭學の習得にも鋭さを見せてゐた。甫周の參加は『解體新書』の出版にとつて甚だ有利であつた。といふのは、當時西洋に對する好奇心はすでに世間一般に行き亘つてはゐたけれども、少くとも表面は國禁の狀態であつたし、先年『紅毛談』でさへ流布を禁止されたといふ先例があるので、況んや『解體新書』の如き直接の飜譯書のことだから、或ひは幕府の忌諱に觸れはしないかといふ疑懼があつた。それで玄白は甫周の斡旋でまづ將軍家治に內獻し、また老中田沼意次にも贈つた。田沼はオランダ趣味を偏好してゐたので却つてそれを推稱した。その書はまた京都の山脇東門（東洋の子）の手を經て近衛公・九條公等にも贈られた。さういつた用意周到の工作で、意外にも無事に流布を見ることが出來た。一つには玄白の勇敢な決心にも因るが、要するに時勢がそれを要求するほどに變化してゐたのである。

『解體新書』の譯者としては、杉田玄白の外に、當然前野良澤の名をも連ぬべきであつたが、どうしてか良澤はそれを好まなかつたので、玄白一人の名で發表された。しかし、良澤の功績の大きかつたことは顯著な事實で、のみならず、良澤は飜譯完成の前年（安永二年・一七七三年）再び長崎に遊んで、西善三郎の遺著『マーリン辭書』の未定稿本を持ち歸つたので、それが飜譯の完成にどのくらゐ助けとなつたであらうかは容易に想像される。

今一人『解體新書』飜譯の贊同者・激勵者として記憶すべき人があつた。陸中一ノ關の藩醫建部淸庵であつた。彼は玄白が蘭學に精進するを傳聞し、しばしば書を裁して疑義を質し、また昔唐土で佛典の飜譯が敢行された故事を引いて蘭方和解の急務を說いたりして鞭韃を惜まなかつたが、遂に『解體新書』刊行の四年後（安永七年・一七七八年）その子亮策（十六歳）を同藩の同僚大槻玄梁の子玄澤（二十二歳）と共に江戸に遊學させ、兩人とも玄白の門に入つたが、

亮策は更に四年の後玄白の養子となり、名を白元と改め、玄澤は前野良澤にも就いて蘭語を學習し、玄白の門下の俊髦として夙く頭角をあらはし、天明三年（一七八三年）には年二十七歳で『蘭學階梯』二卷を著はし、蘭學興隆の機運を頓に促進せしめた。玄白も「此書出でし後、世の志あるもの、これを見て新たに憤悱し、志を興せしも亦少からず。此人を通じ、此等の書の出づる事となりしも、翁が本志を天の助け給ふの一つにやと思ひし事なり」と云つて居る。事實、玄白等の開拓した地磐を最も堅固なものにした第一の功勞者は大槪玄澤であつたことを何びとといへども否むことはできない。洋學の研究は玄澤以後に於いて初めて本格的の進みを取るやうになつたのであるから。

『蘭學階梯』と『解體新書』の間には僅かに十年の歳月があつたに過ぎないが、その十年間に蘭學の研究がいかに長足の進歩をしたかといふことは、『蘭學階梯』そのものが最も雄辯に語つて居る。『蘭學階梯』の著者はいふ、「サテ吾輩今ニ在テコソ難カラザルニ似タレドモ、十年以前老師（玄白）等ノ事ヲ創スル時ハ、異邦ニ漂泊シテ東西ヲ辨ゼズ、暗夜ヲ獨行スルガ如クナリシ事ナレバ、甚ダ入リ難カリシトゾ。支那ノ學術我邦ニ傳ハリシ其古ヘモ定メテ斯クゾアリツラン。一切ノ道、草創ノ人ノ其艱辛勞苦思ヒヤルベキコトナリ。自リ我作レス古ヲノ業ハ右ノ如ク難キ事ナル故、今マデ二百年來事ヲ起サザルモ宜ナリ。然ルニ我老師等年來怠慢スルコトナカリシカバ勤メタリトイフベシ。吾輩今勞ヲ以テ逸ニカヘ、蘭書ヲ取テ大凡了解セザルコト無キヤウニハナレリ。サテ卷ヲ披イテ其端ヲ讀ムニ、始メ泛然トシテ難キガ如クナレドモ、何レノ書、一章一條、短文ノ間ニ於ケルモ、心ヲ潛メテコレヲ解シ得ルトキハ、直ニ物ニ就キ事ニ臨テ實驗スルガ如ク明白ナル事ドモナリ。即チ、其法ヲ取テ此ニ試ムルニ、言ノ如クナラザルモノナシ。」（『蘭學階梯』卷上）。

これは決して年少氣鋭の一蘭學生の放言ではなく、最も信頼すべき青年蘭學者の自信から出た言葉であつた。彼は先輩の低迷蹣跚して行き惱んだ道を今や樂樂と濶歩してゐた。彼は先輩の苦心を語つた後で、「既ニ先輩此業ヲ企テシ頃ハ右ノ仕方ニテアリシトナリ。今ニ於イテハ其積累ノ功ニヨリテ何ニヨラズ一通リハ出來テアルウヘナレバ、至テ修シ易キコトナリ」（『蘭學階梯』巻下）と述べた。それは取りも直さず、時勢の推移と學界の進歩を語つたものである。良澤・玄白等の研究時代は一巻の辭書さへ手に入らなかつたが、玄澤の時はすでに『マーリン辭書』も『ハルマ辭書』も用ひられてゐた。（『蘭學階梯』巻下）。その他、『蘭學階梯』巻下の巻末に記載してある參考書目を見ても、當時すでに研學に便利な書物がいかに多く舶載されてゐたかを想像することができる。

更に愉快なのは『蘭學階梯』には多くのオランダ文字が振假名附で挿入されてあることである。『紅毛談』の禁止以來いまだ二十年にも足らずして、外國文字を挿入して外國語研究の急務を呼號した本が、大手を振つて公刊されるやうになつたのである。世代の推移とはいひながら、幕府の禁令は取消されないままで、事實に於いて完全に無視されたのである。

五

しかし、さういつた風潮を誘致した最初のものは、幕府そのものであつた。否、將軍そのものであつた。

八代將軍吉宗（治世一七一六年—四五年）は少年の頃から天文・暦法に興味を持つて居り、享保元年（一七一六年）三十三歳で將軍職に就くと間もなく、天下の暦法學者・天文學者を召して研究を進めようとした。しかし、吉宗自身が

すでに相當の知識を持つてゐたので、なまなかの專門家では彼を滿足させ得なかつた。例へば、幕府の天文方澁川春海はすでに死歿してゐたので、その門弟猪飼豊次郎が先づ召されたが將軍の質問に答へることができなかつた。また長崎から西川如見と廬草拙が召されたが、兩人とも無資格を暴露した。僅かに建部彦次郎（賢弘）、中根丈右衛門（元圭）等が諮問に應じ得たと云はれてある。中根丈右衛門は西洋曆法・算數の良書はあるけれども寛永の禁書令のために輸入のできないことの不便を訴へたので、享保五年禁書令は（宗門書を除いて）解かれることになつた。ただし、丈右衛門の意味した專門書は皆漢譯であつて、寛永七年（一六三〇年）の禁書令といふのも、漢譯西洋科學書（天文・數學・測量等）を意味したもので、西洋文字の原書のことは初めから問題外の嚴禁書であつた。また船載されても讀み得る者はなかつた。前にも述べた如く、日本で唯一の西洋語（オランダ語）を解する長崎の通詞たちでも西洋文字を使用することは延享二年までは許されなかつたのである。

將軍吉宗は自ら測午儀の作製を指揮して吹上苑内に備へ付け、近侍の者をして觀測せしめたり、また天文臺を神田佐久間町に建てて自製の簡天儀を備へ付け、天文方澁川六藏・西川忠次郎をして觀測の任に當らしめたり、或ひは尺度の標準（享保尺）を規定せしめたり、また小石川白山に藥園を設けて西洋・南洋の植物を栽培せしめたり、西洋產の馬五頭を馭者（ケイズル）と共に取寄せて濱御殿で調馬させたり、また青木文藏（昆陽）・野呂元丈（連山）にオランダ文書譯解法の研究を命じたり、すべてさういつたやうなことが將軍自らの意圖に發したので、幕府も諸侯も西洋文化に對する態度が急激に一變するやうになり、殊に、より自由な立場にある學者（主として醫學者）たちは、從來もその技術だけは蘭方の名に於いて長崎方面から移入されてあつたものを、更に學的に窮めたいといふ熱情を持つやうになつた。

もちろん西洋の事はそれ以前早くから――天文十年（一五四一年）ポルトガルの商船が大友宗麟の領土に漂着して以來――知られて居り、切支丹禁制以後といへども、西洋には知られざる文化の寶庫があるやうに思はれて、一方では宗教宣傳に名を藉りての侵略主義を恐れながらも、他の一方ではその文化に接近したいあこがれが一部知識慾に燃える人士の間に行き亘つてゐたことは事實であつた。殊に、吉宗出現の直前にはイタリアの宣教師ヨワン・シロチ Giovanni Battista Sidotti を江戸小石川の切支丹屋敷に幽閉して、新井白石は彼についての聞書（『采覽異言』『西洋紀聞』）を作り、その寫本も公然でなく流布して西洋に關する知識の目を開かせることに役立つてゐた。

だから吉宗治世下の西洋學關心者は非常に多數であるが、その代表的の者を擧げると、新井白石・細井廣澤・西川如見・廬草拙・栗崎道有・阿部將翁・建部賢弘・中根元圭・今村市兵衛・松宮俊仍・西川忠次郎・澁川六藏・西善三郎・吉雄幸右衞門・本木仁太夫・桂川甫筑・後藤梨春・青木文藏・野呂元丈等があつた。

さうして青木文藏は組織的に西洋學を研究するやうになつた先驅者であり、それに續いて前野良澤（蘭化）・杉田玄白・中川淳庵・石川玄常・嶺春泰・桐山正哲・鳥山松園・桂川甫周・朽木龍橋（福知山侯）・森島中良・小石元俊・大槻玄澤・宇田川玄隨・平賀源内・司馬江漢・麻田剛立等の時代が來て、謂はゆる蘭學興隆の世となつたことは、すでに見た通りである。これ等の人人は豪傑の士と呼ばれてゐた。元龜・天正の昔にあつては、豪傑の士は槍を提げて天下を横行したが、享保以後の新しい豪傑の士は、長崎に下つて通詞の家から『ウェールデン・ブック』を手に入れて、それと首つ引で蘭學を習得し、目に見えぬ前人未到の科學の世界を征服することを目的とした。大槻玄澤はその著『蘭學階梯』に於いて先輩を呼ぶに豪傑の士を以つてしたが、天愚孔平（荻野鳩谷）はまた『蘭學階梯』に序し

て、「奥人子煥豪傑之士也、雖未航海遙能熟於其學」と推稱して居る。子煥は玄澤の諱で、名は茂質、號は磐水、玄澤はその通稱であつた。

大槻玄澤を中心とする蘭學全盛の時代は、寛政（一七八九年―一八〇〇年）から享和（一八〇一年―一八〇三年）を經て、文化（一八〇四年―一八一七年）・文政（一八一八年―一八二九年）まで續いた。玄澤の死は文政十年（一八二七年）であつた。

その間に西洋の科學も、初めは技術的なものから學習され、醫學――殊に外科が學習されてゐたが、內科も學習されることとなり、醫療・藥方の外に、天文・曆法・測量・航海・造船・砲術等の技法・理論も學習されることとなり、地理・博物・歷史等の興味も廣まり、同時に語學その物の學習が次第に組織的に基礎づけられると共に、文化の精神的方面の研究にも着眼する傾向が現はれだした。

幕府時代の最後の四十年間には、もはや日本人の評價に於いてオランダを西洋文化の代表國とするやうな誤認は清算され、從つて蘭學は後退して、その代りに、英學・佛學・獨學なるものが進出し、遂に明治維新の政變と共に、學問上の革新が行はれることになつたのは皆人の知るところである。その革新の端緒を開いた功勞者として、われわれは青木文藏を先驅者として、前野良澤・杉田玄白・中川淳庵の三人の名を永遠に記憶すべきである。

杉田玄白は晩年に及んで（文化十二年・八十三歲）蘭學創始の事を追想し、二卷の回想錄を綴つた。私が此處にしばしば引用した『蘭學事始』がそれである。當時、芝蘭堂（寛政元年創立）の塾頭として、また蘭學の正統の上で玄白の後繼者として、雷名を一世に馳せてゐた大槻玄澤を目安にして書かれたものであつた。その書は一面から見れば、日

本に於ける西洋醫學の發達史であるが、しかし、醫學は蘭學の一部であつたから、また一面から見れば、その書は日本に於ける洋學發達史でもある。明治二年になつてその書は初めて刊行され、明治二十三年再刊の時、初めから刊行に關與した福澤諭吉は、その序文の中で、「内外の士人この書を讀んで單に醫學上の一小紀事とする勿れ」と喝破した。まことに至言といふべきである。

六

最後に私は一つの蛇足を附け足すことを許してもらひたい。

蘭學運動を日本文化史の發展の上から見ると、それは二つの大きな外來刺戟の第二のものに屬する。第一の外來刺戟は、今から千三百年ほど以前にアジア大陸から――初めは朝鮮半島を經て――われわれの遠い祖先に與へられた佛教と儒教を中心とする東洋文化であつた。それはわれわれ自身の文化の基礎となるものを成長させる役割を演じた。第二の外來刺戟は三百年前から始まつて、初めはキリスト教思想で眠つてゐたわれわれの祖先の宗教心を搖り動かし、次は科學思想でいまだ夢想だもしなかつた未知の世界をわれわれの祖先の前に展開させた。その文化的影響は今なほ繼續中で、われわれ自身の新しい第二の文化はその影響によつて刺戟せられ、今や漸くその形を固定させようとしつつある。此の西洋文化吸收の狀態がいつまで續くかは何びとにもわからない。しかし、確實に言ひ得ることは、吸收された文化がわれわれ自身の文化の中に十分に飽和されるまでは續くであらう。

世の中には量見の小さい見方の偏狹な人間があつて、あまりに外國のものを吸收すると、日本本來のものを無くし

はしないかと恐怖する。さういつた恐怖は千三百年の昔にもあつた。三百年前にもあつた。明治になつてからもあつた。今日に於いても見受けられる。しかし、われわれの民族はさういつた恐怖病者の恐怖を無視してもよいほどの強健な胃袋を持つ。われわれの民族は相當ないかものぐひで、昔から手のとどく限りのものは何でもかまはず口に入れた。さうして適度にそれ等をこなして自己成長の營養として來た。だから　われわれは、もつともつとわれわれ自身の消化力に信頼してよいと思ふ。